

9 月月間賞 ビブリオエッセー選考会

産経新聞 令和元年 (2019 年) 10 月 26 日 (土)

本にまつわるエッセーを募集し、夕刊1面で掲載している「ビブリオエッセー」。皆さんのとっておきの1冊について、思い出などとともにつづっていただき、本の魅力や読書の喜びをお伝えしています。9月の月間賞は、帝塚山大学(奈良市)3回生の勝山実優さん(20)の『檸檬』に決まりました。ジュンク堂書店のご協力で図書カード(1万円分)を進呈し、プロの書店員と書評家による選考会の様子をご紹介します。

弾けるイエロー 湧き上がる妄想

大阪府東大阪市
勝山実優さん (20)

失礼ながら、梶井基次郎という男は、変態だ。私が初めて『檸檬』を読み終えて感じたものは、それだった。

私たちの世代でレモンといえば米津玄師だけど、一昔前は「檸檬」だったのか。この漢字も普通じゃない。「握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった」「私は何度も何度もその果実を鼻に持って行っては嗅いでみた」「その産地だというカリフォルニアが想像に上って来る」…。「不吉な塊」を抱いて悶々としていた作家が果物屋の店先で見つけた檸檬にふと癒やされる場面。なでまわしながら、探しものはこれだった、なんて。ほら、変態と言わざるを得ないだろう。

最後には京都の丸善で、積み上げた本の上へ爆弾に見立てた檸檬を残して、何喰わぬ顔で外へ出る。「あの気詰りな丸善も粉葉みじんだろっ」檸檬を通して、梶井の頭の中で次々と湧き上がる妄想が実に奇妙である。紡錘形の果物に寄せる偏愛。そ

9月の月間賞

れを読む私も、梶井の奇妙な物語にはまってしまう。読み進むにつれ、頭の片隅に「黄色」がチカチカして仕方がない。これもまた梶井の術中にはまっているのか。『檸檬』には色硝子、琥珀色や翡翠色の香水壺まで色彩が背景にたくさん登場する。その淀みをかき消すような黄金色の檸檬。たびたび出ては否応にも意識させるのだ。気がつくとも私も梶井と同様、檸檬に魅せられた一人となっていた。

梶井らしく、難解で魅力的



親戚が新聞を見て大騒ぎでした。投稿を勧めていただいた徳永加代先生のゼミ(こども学科)では自作の朗読を。名前しか知らなかった梶井基次郎でしたが「檸檬」は「城のある町にて」など他の短編に比べても梶井らしさが一番出ていると思ったんです。

思索が深くて難解ですがとても魅力的。将来は小学校の先生になって子供たちにたくさん本を読ませたいですね。さっそく京都の丸善にも行ってきました。写真「檸檬」に感謝です。